

(要約版)

アルコール関連刺激への注意バイアス修正訓練を加えた認知行動療法が
飲酒行動の再発防止に及ぼす効果

助成研究者 竹澤 緑 (早稲田大学大学院人間科学研究科・臨床心理学)

共同研究者 田中 佑樹 (和洋女子大学人文学部・臨床心理学)

共同研究者 野村 和孝 (早稲田大学人間科学学術院・臨床心理学)

共同研究者 嶋田 洋徳 (早稲田大学人間科学学術院・臨床心理学)

1. 研究目的

アルコール使用障害 (AUD) に対する治療としては、認知行動療法 (CBT) が有効であることが明らかにされているものの、アルコール刺激に対する反応抑制が困難である者はドロップアウトや再発が生じやすいことが示されている (Stevens et al., 2014)。衝動的な飲酒行動に至らせてしまう要因の1つとして、アルコール刺激への「注意バイアス」があげられ、反応抑制には注意バイアスを低減させることが有効であるということが指摘されている (Schoenmakers et al., 2010)。しかしながら、注意バイアスの低減による飲酒行動低減への効果は一貫していない現状にある。この点については、助成研究者の行った調査において、全ての飲酒者に対して注意バイアスの低減が衝動的飲酒行動の低減に有効なのではなく、飲酒行動が正の強化 (幸福感を得るための飲酒など) と負の強化 (不安な気持ち、または抑うつ的な気持ちから回避するための飲酒など) から維持されている飲酒者 (正負両高群) においてのみ、通常の治療に加えて注意バイアスを低減させることが、衝動的飲酒行動の低減に効果がある可能性が示唆されている。そこで本研究では、CBT 的プログラムに注意バイアス修正訓練 (ABM) を加えることによる、衝動的飲酒行動低減への効果を検討することを目的とした。

2. 研究方法

研究協力者 マインドフルネスに基づく嗜癖行動の再発防止予防 (MBRP) に参加している AUD 患者 6 名 (女性 1 名、男性 5 名、平均年齢 53 ± 8.43 歳) を実験群 (MBRP+ABM) と統制群 (MBRP) に振り分け、全 5 回の ABM を実施した。**群分け** 助成研究者が行った調査 (AUD 患者 12 名、大学生および大学院生 46 名を対象) において、飲酒行動の機能に基づく状態像は、正負両低群、正の強化優位群、正負両高群の 3 つのクラスターに分類されることが示された。この結果を基準として、本研究の研究協力者がどのクラスターに分類されるか分析を行ったところ、正負両低群 1 名 (実験群; P_C)、正の強化優位群 3 名 (実験群; P_A と P_F、統制群; P_E)、正負両高群 2 名 (実験群; P_B、統制群; P_D) であった。なお、助成研究者の調査の結果を踏まえ、正負両高群にあたる P_B は P_D と比べて、注意バイアスの低減によって衝動的飲酒行動が改善されることを仮説

とする。**測度** (a) デモグラフィック項目：年齢、性別など、(b) 飲酒重症度：WHO/AUDIT 問題飲酒指標、(c) 飲酒動機：DMQ-R-J、(d) 報酬知覚：EROS、(e) 生活の質：GHQ28、(f) 再飲酒リスク：ARRS、(g) 注意バイアス：ビジュアルプローブ課題（自動処理段階、統制処理段階）、(h) 衝動的行動：修正ストップシグナル課題（反応抑制困難、反応抑制失敗）。**手続き** 介入前、介入後、1ヶ月後、3ヶ月後、6ヶ月後に測定を行った。なお、本研究は早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理審委員会」の承認を得て実施された（承認番号：2018-294）。

3. 研究成果

まず、注意バイアスと衝動的飲酒行動との関係性に影響を及ぼす可能性もある変数である報酬知覚と生活の質の推移を視察した結果、介入後の P_B（正負両高群の実験群にあたる）において、報酬知覚は向上していなかった一方で、生活の質は向上傾向にあることが示された。この結果から、P_B は、心理的な生活支障度は改善傾向にあるものの、正の強化子（飲酒行動以外の方法で得られる「当該個人にとっての望ましい結果」）には接近できていない状態であると理解できる。つぎに、注意バイアスの推移を視察した結果、P_Bにおいて、介入後に注意バイアスが低減しないことが示された。一方で、正負両低群（P_C）と正の強化優位群（P_A、P_E、P_F）においては、ABMの有無にかかわらず、注意バイアスが低減したことが示された。また、衝動的飲酒行動（反応抑制困難と反応抑制失敗の指標、ARRSを用いた）の推移を視察した結果、P_Bにおいて、介入後に衝動的飲酒行動が低減しないことが示された。

4. 考察

本研究の結果から、正負両高群の実験群にあたる研究協力者 P_Bにおいて、ABMの介入後に注意バイアスが低減されないことが示された。この結果について、正負両高群のような飲酒行動の学習がより強固な状態像においては、刺激に対する反応との結びつきが強いために、アルコール刺激への注意バイアスを低減させることが困難である可能性が考えられる。正負両高群は、飲酒行動が正の強化と負の強化によって維持されているため、正負両低群のような「飲酒による学習が比較的弱い」状態像や、正の強化優位群のような「正の強化のみでの飲酒行動の維持」がされている状態像と比べると、より飲酒行動の学習が強固であることが考えられる。そのため、正負両高群は、正負両低群や正の強化優位群と比べると、アルコール刺激に対する反応性がより強いために、注意バイアスが低減されにくい可能性が考えられる。したがって、正負両高群のような飲酒行動の結びつきが強い状態像においては、アルコール刺激への注意バイアスを低減させることに焦点をおくのではなく、注意バイアスと衝動的飲酒行動との関係性を変容させるような介入が効果的である可能性も考えられる。